



Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	家族制度ト相続税
著者 Author(s)	桑田, 熊藏
掲載誌・巻号・ページ Citation	経済學商業學國民經濟雜誌,16(6):907-916
刊行日 Issue date	1914-06
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/00052217

Create Date: 2017-12-18



經濟學
商業學

國民經濟雜誌

第十六卷

第六號

(大正三年
六月一日發行)

論說

家族制度ト相續稅

法學博士 桑田熊藏

今期議會ニ於テ相續稅法ノ改正案提出セラル、ヤ家督相續ニ對スル相續稅廢止論ハ頻リニ兩院ニ起レリ、殊ニ貴族院ニ於テハ此議ハ多年ノ宿題タリシガ故ニ、此機會ニ於テ之ガ解決ヲ試ミントスル者多少之アリキ。而シテ此議ヤ兩院ニ於テ終ニ成案トシテ現ハレズ、一部ノ論者ガ唯將來ノ希望トシテ之ヲ發表シタルニ過ギザリキ。

家督相續ニ對スル相續稅廢止論ノ論據トスル所ハ、他ナシ我國體ノ基礎タル家族制度ハ之ニ依ツテ破壞セラル、コトヲ恐ル、ニ在ルノミ。余ハ茲ニ此論據ハ果

シテ正當ナル見解ニ基ケルヤ否ヤヲ説明セント欲ス。願フニ家族制度ナルモノハ我國體ト密接ノ關係アルヤ固ヨリ言ヲ俟タズ、縱令ヒ社會進步ノ自然ノ趨勢トシテ其範圍ハ次第ニ縮少セラレンモ、民法其他ノ法律ノ規定ハ之ヲ助長セズシテ寧ロ之ヲ制限スルノ傾向ヲ有セルモ成ルベク、之ヲ維持存續スルノ必要アルコトハ、誰カ之ニ向ツテ異議ヲ挾ム者アラン。此點ニ就テハ余輩ハ熱心ノ程度ニ於テ決シテ反對論者ノ後ニ立ツ者ニ非ルコトヲ斷言スルニ憚ラズ、然リト雖モ此前提ニ依リテ家督相續ニ對スル相續稅ヲ廢止セントスルハ、論理ノ徹底セザルモノアルヲ憾ムナリ。換言スレバ此相續稅ナルモノハ果シテ家族制度ノ頽廢ヲ來タスノ虞アルヤ否ヤ、余輩ハ論者ノ如ク輕々ニ之ヲ斷定スル能ハザルナリ。

此問題ヲ解決セント欲セバ、家族制度ト相續財產ノ關係ニ遡ツテ講究ヲナスノ必要アリ。凡ソ財產ハ家族制度ノ必要條件ナルヤ否ヤ、若シ財產ハ家族制度ノ必要條件ナリトセバ、相續財產ニ對シ相續稅ヲ賦課スルコトハ此必要條件ニ向ツテ打撃ヲ試ムルノ嫌アルガ故ニ相續稅ハ家族制度ニ對シ危險ナル結果ヲ生ズルモノト云ハザルヲ得ズ、若シ財產ヲ以テ家族制度ノ必要條件ニ非ラズトセバ、相續稅ニ

就テ此非難ヲ加フルハ誤謬ノ見解ナリト云ハザルヲ得ズ。

家族制度ナルモノハ觀察ノ方面ノ異ナルニ從ツテ種々ノ解釋ヲ與フルコトヲ得ベシ倫理ノ方面ヨリスレバ家族制度ハ家名ノ尊重血統ノ繼續ヲ以テ理想トスルモノト云フベシ法律ノ方面ヨリスレバ家長ノ權利ノ範圍程度ヲ擴張スルヲ以テ其目的トセルモノタリ經濟ノ方面ヨリスレバ家族相互ノ間ニ於ケル生産消費ノ共同ナルコト即チ家長ハ家族ヲ代表シテ財産ノ主體タルト同時ニ家族ニ對シ扶養ノ義務ヲ負フコト是ナリ。

家族制度ノ意義是ノ如シトセバ財産ニ對スル關係ノ問題ハ自ラ釋然タルベシ、倫理上ノ意義ニ依ルトキハ家族制度ハ寧ロ情義上ノ事實トナリ物質上ノ事實ニ非ラズ從ツテ家族制度ト財産トハ何等ノ關係ナキコト、ナルベシ法律上ノ意義ニ依ルモ亦同一ノ論決ヲナスヲ得ベシ奈何ントナレバ家長ノ權利ノ範圍程度ヲ定ムルニ就キ財産ノ關係ハ全タク別箇ノ問題タレバナリ唯經濟上ノ意義ニ依ルトキハ家長ガ家族ニ對シ扶養ノ義務ヲ果タスニ就キ財産ハ主要ナル關係ヲ有スルガ故ニ、財産ハ家族制度ノ必要條件ナルガ如ク見ユルナリ此點ハ最モ慎密ナル

考慮ヲ要スルコト、云フベシ。

余ノ見ル所ニ依レバ此論決タル亦皮相ノ見解タルヲ免レズ、今若シ財産ヲ以テ家族制度ノ必要條件ナリトセバ、財産ヲ有セザル者ハ此條件ヲ缺キタル者ナリ、此種ノ社會階級ニハ家族制度存在ノ餘地ナシト云ハザルヲ得ズ、然ルニ事實ニ於テハ財産ノ收入ナキ者ノ間ニ於テモ家族制度ハ儼然トシテ維持セラル、ニ非ラズヤ、是レ他ナシ、扶養ノ義務ヲ果タスニ就テハ、必ラズシモ財産ノ收入ヲ必要トセズ、勞力ニ依ル收入ニ依リ、其目的ヲ達スルニ依ルナリ、是ノ如クシテ家ニ何等ノ財産ナキ所ノ下層社會ニ於テモ亦家族制度ヲ維持スルコトヲ得ルナリ。家族制度ハ強チ資本家ノ獨占ニ非ルコトヲ知ラバ財産ノ收入ハ必ラズシモ扶養ノ義務ヲ果タスノ唯一ノ方法ニ非ラズ、從ツテ家族制度ニ就キ經濟的解釋ヲ下ダスモ財産ハ家族制度ノ必要條件ナリト斷定スルコトヲ得ザルナリ。

右述ブル所ニ依リ家族制度ハ何レノ方面ヨリ觀察スルモ財産ノ所有ヲ以テ必要條件トナスモノニ非ラズ、然リト雖モ余ハ家族制度ト財産トノ間ニ多少ノ關係アルコトヲ認ムル者ナリ。即チ財産ハ家族制度ノ維持ヲ容易ナラシムルモノタリ、

財産アル者ハ、全タク之ナキ者ニ比スレバ、家族制度ノ維持ハ容易ナルベク、又多ク財産ヲ所有セル者ハ、少ナク之ヲ所有セル者ニ比シ、家族制度ノ發展ヲ期スルコトヲ得ベシ、此前提ニ依ルトキハ、財産ハ家族制度ニ對シ便宜ノ問題タル關係ヲ有セルモノニシテ、必要條件タルノ地位ヲ占ムルモノニ非ラズ。

今假ニ論者ニ數百歩ヲ讓リ、財産ヲ以テ必要條件ナリト假定スルモ、尙家督相續ニ對スル反對ノ理由トシテ極メテ薄弱ナルモノト云ハザルヲ得ズ、顧フニ家族制度維持ノ條件トシテハ、財産ハ一定ノ限度以下ヲ以テ満足セザル可ラズ、夫ノ佛獨兩國其他瑞士等ニ行ハル、家産法ノ如キ一定ノ限度以下ノ財産ヲ以テ一種ノ世襲財産トナセリ、此種ノ法律タル余ハ之ヲ以テ一種ノ社會政策ノ立法トナシ、歐洲多數ノ學者モ亦同一ノ見解ヲ抱持セリ、後日之ヲ以テ家族制度維持ノ方法トナシ、個人主義ノ旺盛ナル歐洲各國ニ於テ家族制度復活ノ兆候ナリト説明セル者アリ、余ハ立法ノ理由ニ就テハ全タク反對ノ意見ヲ有セルモ、法律實施ノ結果ニ就テハ或ハ此説明ハ一ノ豫言タルノ力アルヤモ未ダ知ルベカラズ、蓋シ家族制度ノ維持ト云フコトハ、必ラズシモ生活程度ノ變化ナキコトヲ意味スルモノニ非ラズ、夫ノ

三井家ヤ岩崎家ガ少シモ生活ノ程度ヲ低下スルコトナク、經濟的ニ現狀ヲ存續スルニ非レバ、是等ノ富豪ノ家族制度ハ維持セシタルモノニ非ラズト云フコトヲ得ズ、若シ經濟的現狀ノ存續ト家族制度ノ維持トヲ同一視センニハ、財産ノ減少ハ家族制度ノ頽敗ナリト云ハザルヲ得ズ、是ノ如ク論ジ來ルトキハ家族制度ハ富豪ノ獨占ナリトノ極メテ奇怪ナル結論ヲ生ズルニ至ルベシ之ヲ要スルニ財産ヲ以テ家族制度維持ノ必要條件ナリトノ前提ヲ是認スルモ、此條件ヲ充タスベキ財産ハ歐洲ニ於ケル家產法ノ内容タル財産ノ程度ナリ、而シテ相續稅ハ此程度ノ財産ニ手ヲ觸ルベキモノニ非ラズト云フコトヲ得ベキモ、此程度以上ノ財産ニ對シ相續稅ヲ賦課スルハ至當ノ措置ニシテ、之ガ爲メニ家族制度ニ何等ノ危險ヲ生ズルモノニ非ラズ、我國ノ相續稅法ニ於テ各國ノ法律ハ均シク一定ノ課稅ノ最低限度ヲ設ケタリ、而モ改正法ニ於テ家督相續ノ場合ニハ之ヲ貳千圓ニ昂上シタリ、若シ此程度尙ホ低キニ失セリトセバ更ラニ之ヲ五千圓ニ昂上スルモ可ナルベシ、去レバ此前提ニ依ル反對論ハ結局課稅ノ最低限度ノ問題ニ歸着スベク、相續稅其物ノ本體ニ就テハ何等ノ關係ナキモノタリ。

財産ハ家族制度ノ必要條件ニ非ラズ、寧ロ便宜ノ問題ナルコトハ、余輩ノ持論ニ

シテ本論ノ骨子モ亦之ニ外ナラズ、今此論據ニ依リ我國相續稅法ヲ批評センニ、改正ヲ加フベキ餘地ノ尙ホ綽然タルモノアルヲ見ル。先ヅ講究ヲ要スルコトハ稅率ノ高低ナリ、改正法ニ於テ年賦ノ方法ニ依リ納付ヲナスモノト假定シ、年々ノ收益ヲ割キテ支出シ得ル程度ヲ標準トシ、稅率約半額ノ減少ヲナシタルハ、至當ノ處置ナルベシ、憾ムラクハ財産ノ多少ニ應ジテ此輕減ノ步合ヲ異ニセズ、稍々均一ノ步合ヲ以テシタルコトナリ。從來ノ規定ニ依リ負擔ノ過重ヲ感ジタルハ、寧ロ少額ノ財産ヲ相續セル者ナリトセバ、輕減ノ步合ニ就キ少額ノ財産ニ厚クシ多額ノ財産ニ薄クスルハ當然ノ事タルニ拘ハラズ、稅率ノ改正ニ此方針ヲ採ラザリシハ正當ノ措置ニ非ラズト斷言スルヲ憚ラズ。

課稅ノ最低限度ニ就キ之ヲ貳千圓ニ昂上シタルコトハ先ニ述ブル所ノ如シ此事タル之ヲナスハナサザルニ優レルハ言ヲ俟タザルモ、戰後物價騰貴ノ比例ヨリ類推スルトキハ、之ニ依ツテ少額ノ財産相續者ニシテ從來ニ比シ免稅ノ特典ニ浴セル者若干ノ増加アルヤヲ疑ハザルヲ得ズ、余ハ少ナクモ五千圓ヲ以テ此限度トナスノ必要ヲ唱道セント欲ス。

年賦延納ノ年限ニ就キ現行法ハ之ヲ五箇年ニ制限セリ、而シテ改正法ハ之ニ向

ツテ何等ノ修正ヲ加フルコトナシ、願フニ此方法タル政府ノ收入ニ影響ヲ與フルコトナク、納稅者ニ在ツテハ極メテ有利ノ結果ヲ生ジ、事實上負擔ノ輕減トナルモノナリ。英國ノ相續稅法ハ十年ヲ以テ最長期トナセルガ如クニ我國ニ於テモ亦十年ニ改ムルカ、少ナクモ七年ニ延長スルハ必要ノ措置ナリトナス、又年賦延納ヲ許可スルニ當リ、稅額百圓以上ニ限レル現行法ノ規定ハ實ニ不條理ノ甚シキモノナリ。百圓ノ稅額ニ相當スル財産ハ約壹萬圓ナリ、壹萬圓以上ノ財産相續者ニ向ツテハ此特典ニ浴セシムルニ拘ハラズ、此以上ノ者ニ向ツテ一時納付ヲ強制スルハ社會政策上非難スベキモノタルノミナラズ、家族制度ノ論據ヨリスルモ多額ノ財産相續者ニ對シテハ其維持ヲ容易ナラシメ、少額ノ財産相續者ニ對シテハ之ヲ困難ナル状態ニ陥ラシムルハ實ニ不當ノ事タルヲ免レズ、政府當局ハ少額ノ納稅者ニ就テ年賦延納ヲ許ストキハ、徵稅ノ手續煩苛ニ失シ費用多キヲ要スルノ理由ニ依リ、之ニ反對センモ、是ノ如キ枝葉ノ事情ノ爲メニ相續稅ト家族制度ノ關係ニ於ケル重要ナル結果ヲ沒却スベキニ非ラズ、他日稅法改正ノ時機アラバ此改正ハ第一着ニナサルベカラズ。

以上述ブル所ヲ要スルニ、相續稅ト家族制度ノ關係ニ於テ財産ハ家族制度ノ必

要條件ニ非ラズ、便宜ノ問題ナリトノ前提ニ基キ家族制度ノ維持ノ爲メニ家督相續ニ對スル相續稅ヲ廢止スルノ必要ナシ、唯課稅ノ方法ニ就キ相當ノ改正ヲ加ヘ、由ツテ以テ家族制度ノ維持ヲ容易ナラシムルヲ以テ足レリトセザルベカラズト云フニ在リ。

余ハ本論ヲ了スルニ當リ我國ノ相續稅法ハ家族制度ノ關係ニ於テ一種ノ特徵ヲ有セルガ故ニ、其論據ニ就キテモ、外國ニ行ハル、モノト同一ノ説明ヲ與フベキニ非ラズ、從ツテ外國ニ於テ財政學者ノ唱フル所ノ理論ガ奈何ナル範圍ニ於テ我國相續稅ニ應用セラルベキカラ明カニセント欲ス。

財産ノ相續ハ相續人ニ在ツテ不時ノ收入ナルガ故ニ之ニ課稅スベシ、否重キ負擔ヲナサシムルモ可ナリトノ説ハ歐米財政學者ノ多數ノ唱道スル所ナリ、我國ノ相續制度ニ於テ此理論ハ果シテ正當ナルヤ否ヤ自ラ疑問ニ屬セザルヲ得ズ、遺產相續ノ場合ニハ此理論適用セラルベキコトハ固ヨリ言ヲ俟タザルモ、家督相續ノ場合ニ於テハ相續人ハ財産ノ相續ニ就キ已ニ確的ナル豫想ヲ有セルナリ、相續ノ開始ニ依ツテ此豫想ガ事實トナリテ現ハル、ナリ、之ヲ以テ不時ノ收入ト認ムベキ理由ハ毫モ之ナシト云ハザルヲ得ズ、從ツテ此理論ヲ以テ我國相續稅ノ根底ト

ナスコトヲ得ズ。

財産ノ相續ハ所有權ノ移轉ナリ、即チ一種ノ權利移轉ノ行爲ニ外ナラズ。賣買讓與等ニ依ル權利ノ移轉ト其性質ヲ異ニセズ。從ツテ權利ノ移轉ヲ以テ課稅ノ標準トナス所ノ交通稅ノ一般ノ理論ニ依リ相續稅ヲ説明スルハ亦歐米財政學者ノ常套ナリトス。此理論ハ我國相續稅ニ應用シテ、何等ノ不條理ナキモノタリ。然ルニ世間往々說ヲナス者アリ、其云フ所ヲ聞ケバ、我國ノ家族制度ニ於テ相續財産ハ事實上家ノ財産ニシテ家長ノ專有ニ非ザルガ如クニ思惟セラレタリ。從ツテ權利移轉ノ觀念ニ就テモ賣買讓與ノ場合ト大ニ其趣ヲ異ニセリ。寧ロ權利移轉ト目セザルヲ以テ我國家族制度ノ本體トナスベシ。從ツテ權利移轉ノ論據ニ依ツテ相續稅ヲ説明スルハ不當ナリト云ヘリ。余ハ此反對論ハ我國家族制度ノ實質ニ適合セルモノタルヲ疑ハズト雖モ、奈何ニセン我國ノ法制上家ヲ以テ一種ノ法人トナセルニ非ラズ全タク家長個人ノ所有ニ歸セルガ故ニ權利移轉ノ事實ハ法律上之ヲ沒却スベキ理由ナシ。從ツテ此反對論ハ我國ノ法制ニ照ラシ何等ノ價值ナキモノト云ハザルヲ得ズ。去レバ交通稅ニ關スル一般ノ理論ハ我國相續稅ニ適用スルコトヲ得ベシ。